

ミンク飼料としての乳

北海道ミンク農業協同組合
長谷川 寿三



近年特に毛皮として流行しているミンクはイタチ科に属する哺乳動物で、元来は米、カナダ、アラスカの小川、湖沼周辺に棲息し、魚蛙鳥鼠或いは他の小さな動物を捕獲常食している肉食動物である。

養殖ミンクの歴史は一八六六年には始まり、一九三一年米國ウィスコンシン州に暗褐色の被毛を有する野生ミンクにより最初の突然変異が出現し、それ以来今日まで、新品種作出の興味と市場価格の大なること

によって養殖ミンクの研究増殖は急速に進み現在ブラック(黒色系)、サファイヤー、プラチナ、バイオレット(青灰色系)、パール、パステル、トパーズ(褐色系)、白色系等……数十種に及ぶ色とりどりのミンク作出に成功し、それにもなつて世界で約二、三〇〇万枚のミンク毛皮が生産され、これらの需要に画期的な発展をもたらした。

我国では昭和の初期、樺太、北海道において一時飼育されたこともあるがやがて影をひそめ、戦後昭和二十八年北海道庁が北海道における適地産業としてミンク飼育が

将来とも有望であることに着目、又機を同じくして大手資本進出によって昭和三十四年から三十五年にかけて北海道にいわゆるミンクブームをひきおこし、今日ではおよそ四〇万頭のミンクが主として北海道その他東北各地で養殖され、今冬における生産毛皮は約二七万枚、金額にして約一四億円以上と見込まれるに至つた。

一 養殖ミンクの一サイクル

ミンクの繁殖時期は三月であり分娩は大体五月上旬で最終交尾時から数えた妊娠期間は約五〇日前後であつて、普通三頭一六頭の仔ミンクを分娩する。分娩から哺乳期を経て離乳する迄の期間は平均八週間で、その頃ともなればミンク一日の成長は人間の約三〇日に匹敵すると言われる様に殆ど母獸と変らない位急速に成長する。即ち仔ミンクは生後六週間で最終体重の約二〇%八週間で四〇%一週間で六〇%、一六週間で八〇%も成長し十月ともなればオスで

平均一・五キログラム(二・〇キログラム、メスで平均〇・七キログラム)と成獣並に成長し、その年の十一月下旬から十二月にかけて剥皮され、優良仔ミンクは翌年三月に種ミンクとして繁殖に供せられる。

二 ミンクの飼料

前述の通りミンクは肉食動物であり今日一般に第二表のような飼料配合が基準とされている。

我国における飼料配合はその飼料資源から考えても魚を主体とした動物性蛋白の給与が大半であつて、これも今日必ずしも容易かつ安価に供給することができず寧ろその地域によっては供給量が減少し、他の業界との間に激しい競争をひきおこすため価格が上がりあげられる傾向にある。又一方では大判の毛皮と良質な毛皮を生産しなければ国際商品であるミンク毛皮は将来国際競争に打勝つてゆくことができず、したがつてこれらに代る新しい分野での飼料の開発が急務となつて来た。

ミルクは優良な
蛋白質給源である

乳は天然食品の中で栄養的に最も優れたものでありミンク飼料の一つでもある。乳の主成分は水分と動物の栄養素として絶対に欠くことのできない蛋白質、動物細胞の重要な構成成分である脂肪、その他炭水化物、無機物、ビタミン等が含まれている。この中、蛋白質の価値は構成するアミノ酸の

第1表 出産体重の倍に達するまでの日数と乳汁

日数	乳汁の成分(%)			
	蛋白質	灰分	カルシウム	磷
人	1.6	0.2	0.03	0.05
馬	2.0	0.4	0.12	0.13
牛	3.5	0.7	0.16	0.20
豚	5.2	0.8	0.25	0.31
犬	7.4	1.3	0.46	0.51
猫	9.5	7.0	1.0	—
ミンク	6	7.5	1.1	0.20
家兎	6	10.4	2.5	0.89

第2表 ミンクの飼料配合例

	魚を主体とした場合(%)		肉・内臓・家禽副産物を主体とした場合(%)		赤肉を主体とした場合(%)	
	繁殖期	成長期	繁殖期	成長期	繁殖期	成長期
魚(雑魚)	40~60	40~70	15~25	15~25	15~30	15~30
肉・内臓・家禽副産物	10~20	10~20	40~50	40~60	15~30	15~30
赤肉(主として鯨肉)	0~10	0~10	5~15	5~15	20~35	20~35
肝臓	5~15	0~10	5~15	0~10	5~15	0~10
穀類	10~20	10~35	10~20	10~35	10~20	10~35